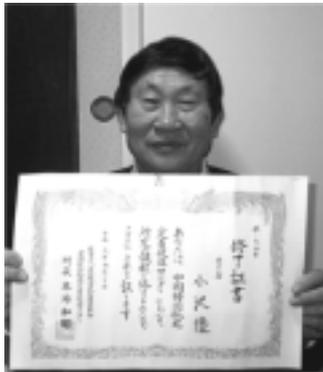


## 8 一枚の写真がつなぐ分かれた人生

### —小沢優、十三歳のある中国残留孤児の場合—

聞き書き：資料収集調査員 本島 和人



←定着促進センターの  
修了証書を手に（2002  
年11月、自宅にて）

小沢夫妻近影（2005年  
3月、自宅にて）→



#### 小沢優（おざわ まさる）の略歴

昭和6（1931）年12月20日 長野県上伊那郡南向村（現中川村）桑原に、父鷹雄、母ます  
ゑの三男として生まれる

昭和13（1938）年8月 一家8人で渡満  
東安省密山県南五道崗（「崗」とも読めるが、ここでは長  
野県満州開拓史の記述による）の第6次長野村開拓団に入植  
開拓団員千余名とともに一家6人で避難開始

昭和20（1945）年8月

昭和21（1946）年2月 父姉妹弟を次々に失い、奉天の収容所を離れる

1947（昭和22）年 養父とともに北京市へ移る

1954（昭和29）年 尹瑞秀と結婚、2女に恵まれる

昭和57（1982）年12月 長野県中川村へ一時帰国（翌年10月まで）

平成元（1989）年2月 永住帰国

現在 長野県駒ヶ根市に妻と在住

#### 第6次南五道崗長野村開拓団の概要

団の構成：長野県単位集団移民、送出母体は長野県。団員は、長野県下伊那郡・上伊那郡・諏  
訪郡を中心とする長野県各地の出身者によって構成され、在籍者は303戸、1,371  
名。

入植地：東安省密山県南五道崗

入植式：昭和12年6月22日

敗戦時と引き揚げの状況：

敗戦時の出征者は212名、在団者は1,131名。

在団者のうち引き揚げ332名、死亡759名、未帰還38名、不明2名。

（長野県開拓自興会満州開拓史刊行会編『長野県満州開拓史 各団編』1984による）

## はじめに

「びっくりしたのは、広いなあーって。ここから向こうまで見えないくらい、うん、開拓したあとがね、見えないくらい、ものすごく広くて。」

6歳の少年の目に映った満洲は広大であった。少年は小沢優、昭和6(1931)年12月20日、長野県上伊那郡南向村(現中川村)桑原に、父鷹雄、母ますゑの三男として生まれた。生まれ故郷の南向村桑原を8人の家族とともにあとにしたのは昭和13年8月、6歳と8ヵ月、南向尋常小学校桑原分校1年の夏のことであった。

優の一家8人は東安省密山県南五道崗の長野村開拓団に入植した。昭和20年8月からの逃避行と収容所での生活のなかで、父を亡くし、姉も亡くし、2人の妹と別れ、弟を亡くし、奉天の収容所で家族のすべてを失い独りぼっちとなった。それからの歲月、中国人の養父のもとで日本人であることを隠し、新中国を生きてきた。再び生まれ故郷に一時帰国できたのは44年後のことであった。6歳の少年は51歳になっていた。

2002年冬のある午後、駒ヶ根市の県営住宅のお宅を訪ねた。語りは言葉を探しながら訥々としていたが、言いよどむことなく淡々と続いていった。日本語を使う機会がないまま青春から壮年期を中国で過ごし、日本語での会話では自分の意思を伝えるには十分ではなかったかもしれない。しかし語りは途切れることなく、幼い頃の記憶からはじまり、渡満、敗戦、逃避行。養父との出会い、新中国での生活、結婚、そして肉親捜し。一時帰国、永住帰国、さらに現在まで。3つに分かたれた70年余の人生を一気に語った。

## 1. 長野県南向村桑原、6歳までの故郷

### 桑原、昭和6年生まれ、8人家族

小沢優の生まれた旧南向村桑原(現中川村<sup>たかね</sup>高嶺)は、長野県南部の天竜川<sup>てんりゅうがわ</sup>左岸にある。天竜川の西に中央アルプス、東に3000メートル級の南アルプス山脈がそれぞれ南北に連なる。その南アルプスと天竜川に挟まれてやや低く連なる伊那山地がある。その山間部に優は生まれた。伊那山地を切断するように小渋川<sup>こしぶがわ</sup>が天竜川に注ぐ。現在の小渋川はダムに堰き止められている。そのダム湖に北から四徳川が溪谷を刻んでいる。東と南を谷に刻み込まれた標高700メートルを越える山地の南端にある尾根、その尾根からは東から南向きの山肌の斜面にわずかに平坦な土地がへばりつくようにして見える。ここが桑原である。今では数戸の住宅が点在するのみ。廃屋も少なくない。桑原学校跡、南の尾根にある桑原神社がかつてをしのばせる。昭和36年6月、この地方を襲った梅雨前線豪雨と呼ばれる集中豪雨による大災害、地元では「三六<sup>さんろくさい</sup>災害」と呼ぶ、その災害と高度経済成長の波のなかで、多くの住民がこの地を去り、集落としての人々の暮らしはしだいに消えていった。

## 1年生夏までの小学校

優の語りは、今はない桑原小学校の遠い記憶からはじまった。60年以上前の記憶をよみがえらせて語りはじめた。

桑原にね、昔の小さい小学校があって、その小学校に（数え年で）7歳の時に上がった。小学校に上がる前のことは、水道もないもんで、下に下りていくと小川があるもんで、その川から水を汲んで、上まで運んだ。家の回りに田んぼとか、畑とかがあった、そういうことを少しぐらい覚えておる。

学校に通うにも大変だったんだよ。山があつてねえ、毎日かばんを背に曲がりくねった山間の小道を2.5キロメートルも雨の日も風の日も通ったんだよ。特に雪が降ったりすると、とても大変だった。そういうことをちょっと覚えておる。小学校に入学したとき同級生は何人かなあ、5、6人はおったと思います。小学校全体では3、40人まではおらないと思う。そのときの先生の名前は、覚えていません、失礼ですけど。

優の語りは礼を失することがない。つねに姿勢正しく丁寧である。日本語の表現力にもどかしさを感じているように思われるが、終始、整然とした語りである。小学校というのは、南向村尋常小学校の桑原分校のことである。この分校は戦後まで存続していたが、経済成長期の住民の離村により中川小学校に統合され灯が消え建物も取り壊された。今は山の東向きの斜面にわずかに平坦な土地が残っている。生い茂った木々と草に覆われ、その一角に「桑原学校跡」という碑が立ち、かろうじて分校があったことがうかがえる。

満洲へ渡ることになったのはどのような事情だったのだろうか。幼い優の記憶のなかには残っていない。詳しい事情はわかる由もない。しかし家族についての記憶は確かに残っている。

小学校に入って4ヵ月たったばかりのとき、国のほうから、満洲へ開拓団に入るようにと言われた。その時の大家族は、8人かなあ。お父さん、お母さん、それとお兄さん、上のお姉さん、下のお姉さん、それともう1人三女（やゑ子）がおったんですよ。それに私と、弟と、それと勝子ともう1人。『長野県満州開拓史 名簿編』に載っている満子というのは、満洲へ行ってから生まれたんです。その他に三女、もう1人お兄さんも載っていないけど……。あー、満洲へ行く前に、二男（嘉人）と三女が亡くなったって聞いたけど。

## 神社で、大家族の写真を撮って

父母と6人の子どもたち、子だくさんの一家であった。父鷹雄が満洲への移民を薦められ、決意するまでには長い時間は必要なかっただろう。記録によれば、優の父鷹雄の入植は、昭和13年3月である。父鷹雄がまず3月に入植し、夏にいったん戻り、家族を呼び寄せたのである。昭和13年3月の南向村桑原地区からの入植は3家族で

あった。小さな集落から3家族が同時に入植した背景にはどのような事情があったのだろうか。

優の生家のある現中川村桑原の地は山のなかである。耕地に乏しい山地で、父鷹雄は一家8人の暮らさをどのように立てていたのだろうか。一家8人を支えるに十分なだけの耕作地があったとは思いがたい。

・一緒に満洲へ行くとき、その桑原の小学校で、確か夏休みに入る前だったと思う、お父さんが学校に連れて行って来て、先生が立つと教室の前に立って、お別れの挨拶をした。他の友だちから、鉛筆や消しゴムとか、ノートをいただいて、満洲へ行ってもしっかり勉強しなさいって、頑張るって勉強するように言われた。それで友だちと別れて、学校のことも忘れてね、8月に、確か、家族全部で満洲へ行った。そのことを覚えております。それで、全家族が向こうへ、満洲へ渡る前日、桑原に、山の向こうに神社があるんだよ、その前で、全家族写真を撮った。それから向こうへ渡る前の日に、山の中から下りてきて、中川村（旧南向村）<sup>おおくさ おきまち</sup>大草の沖町っていうところに、私の伯父さんとお伯母さん、お父さんの兄弟が、そこに住んで、そこに1晩泊めてもらって。次の日、家族全員と一緒に、何に乗ったのかなあ、馬車か、バスか、そのへんは覚えてない。乗り物に乗って故郷をあとにした。

「兄の家に、満洲へ行く前に桑原神社で一家で撮った写真がある」と聞き、後日、優の案内で兄弘明<sup>ひろあき</sup>夫婦の住む桑原の生家を訪ねた。雪が舞ってきそうな冬の初めであった。優の住む駒ヶ根市の県営住宅から車で15分、役場のある中心部を過ぎ、東に向かって10分ほど車を走らせる。右に折れ脇道に入る。車1台がやっと通れる山道をさらに10分、ゆっくりと上り詰めていく。めざす優の生家に着いた。

伊那山地の尾根の上に風を避けるように平屋の住宅と物置小屋が連なっていた。家の作りは簡素である。玄関の戸を開け、2畳ほどの土間を上がるとそこが居間、弘明はしつらえてあるこたつに玄関のほうを向いて座っていた。耳が遠く補聴器に頼っても初対面の私の話は聞き取りにくいらしい。座敷の鴨居に掲げられていた額縁入りの写真を優が外してくれた。

写真の季節は夏である。日本を出発する前に、故郷の小さな社で写真を撮ることを思い立ったのは父鷹雄であろう。坊主頭に丸縁の眼鏡、上唇にわずかに髭をたくわえ、いかにも実直そうな父である。この時37歳、ズボンのベルトを深く締め右手に戦闘帽を持ち草履履き、質素で



日本を出発する前の一家の写真

ある。父の手前に気をつけの姿勢でかしこまっているのが弟の進<sup>すすむ</sup>、4歳。半袖シャツに半ズボン、靴を履き、手を脇に揃えて首をすぼめ、はにかんだ表情が可愛らしい。というよりは今では痛々しい。その右が下の姉千恵子<sup>ちえこ</sup>、12歳。半袖のワンピースに洒落た麦藁帽子、草履履き。山の中の服装ではない、着飾ったよそ行きであろう。その隣中央に立っているのが兄弘明<sup>ひろみ</sup>、15歳。夏の学生服に折り目のついたズボン、草履履き。跡取息子にふさわしい威厳を感じさせる少年の姿である。母さかゑ、39歳。着物に白足袋に下駄のように見える。6人の母親である。男の子と女の子を1人ずつ亡くしており、渡満後に1女をもうけているので生涯に9人の児を産んでいることになる。気丈な女性だったと見える。左胸に抱かれているのが妹の勝子<sup>かつこ</sup>、1歳。よだれかけが見える。上の姉春子<sup>はるこ</sup>、14歳。着物に白足袋と下駄は母と同じである。左手に日傘を持ち、大人びてみえる。その前に気をつけの姿勢でまっすぐに立っているのが優<sup>ゆう</sup>、7歳。夏の学童服に半ズボン、素足に靴、革靴のように見える。気をつけの姿勢は父に教えられたのだろうか。幼さが残り、あどけない。この他に二男嘉人<sup>かじん</sup>と三女やゑ子がいたが幼くして亡くなっており、渡満後に生まれた満子<sup>みつこ</sup>がいた。これが小沢優の一家である。

この写真に写っている8人の家族のうち、敗戦後に日本に帰着くことができたのは、現地召集されて朝鮮で敗戦を迎えた兄弘明と、満洲で山形県出身者と世帯をもって帰還した姉千恵子の2人だけであった。敗戦の前年、まず母が幼子を残して亡くなる。逃避行のなかで頼るべき父も、姉も失い、残された幼い妹弟も亡くなり、別れていく。生まれ故郷の桑原神社で写真を撮ろうと決めた父鷹雄は、このあと一家に降りかかる過酷な運命を予感していたのであろうか。故郷に残された1枚の写真とその記憶が長く中国に残された優の運命を変えていくことになる。満洲へ渡る直前に撮ったこの1枚の写真の記憶が優には鮮明に残っていたのである。

## はじめて大海を見る

8人家族の優一家は故郷を後にしていく。小学校を1年の夏まで過ごしただけの優は、生まれ故郷を離れるのははじめてのことであった。目にするものすべてが新鮮であった。驚きであった。

・・・それで新潟の隣の直江津<sup>なおえつ</sup>から船に乗って、中国のどこで降りたのかなあ、天津<sup>てんしん</sup>か、そのへんだと思うんだよ、大連<sup>だいれん</sup>ではないと思うだが。そいで汽車に乗って、どれくらい時間が経ったかわからないけれど、何日乗ったか、わからないけれど。・・・あの頃はまだ子どもだったもんで、船に乗って、船の一番上にね。大海を見る、ああ、すばらしいなあとか、夢を見とるような、うれしいような、まだ子どもだもんでね、山の中で、どこへも行ったことがないもんで、山ばかりだから。

満洲へ渡る時に、父鷹雄や母ますゑが子どもたちにどんな説明をしたのだろうか。いろいろ話をしてくれたようにも思うのだが、その内容についてはっきりした記憶はない。ただ「これから満洲へ行く」、そう言われたような記憶が残っている。

## 2. 東安省密山県南五道崗、満洲の入植地

### 長野村開拓団

生まれ故郷を1度も離れたことがなかった優の初めての旅は長旅だった。それまでには3キロほど離れた村の中心に出かけることさえなかったという。親戚に1泊し、見送られ、電車に乗り、列車を乗り継ぎ、日本海を渡り、満鉄の汽車に乗り、たどり着いた。着いた所は生まれ故郷とはまったく違っていた。

・何日間か汽車に乗って、それで密山県、昔は東安省といってねえ。密山市から、ずっ—と行って、密山市と勃利の真ん中くらい。・開拓団は、長野村といって、長野県から来た開拓団だもんで、長野村に名前を付けようって、そういうことで、付けたんですよ。

向こうに着いて、まず、びっくりしたのは、広いなあ—って。ここから向こうまで見えないくらい、うん、開拓したあとがね、見えないくらい、ものすごく広くて。行ったときには、みんなやっぱり、日本の小さい山の中よりも、けっこう暮らしよいなあ、って、そういう思い出があったんだよ。きっとね、来てよかった、と思っておったんだよ。

開拓地に着いた優の第一印象である。確かにこの開拓地は豊かだったようである。一家が入植した第6次南五道崗長野村開拓団について『長野県満洲開拓史 各団編』は、東安省密山県南五道崗の入植地の状況を次のように伝えている。

団の位置は、満洲北東部の黒竜江・松花江・烏蘇里江に囲まれた低平地の南部にある。完達山脈の南面にあたり、東西四五キロメートル、南北一二キロメートルの広大な地域であった。地勢は、山地・丘・平原・湿地・川が入りこんで変化に富んでいた。北は斐徳里川をはさんで北五道崗（山形県開拓団）に接し、南東は小斐徳里川に境していた。地質は黒色粘土の腐植土で、地味は肥沃であった。交通は虎林線の東安駅から本部まで二六キロメートルの開拓道路が通じていて、これに平行して東安から勃利までの軍用道路が走っていた。まったくの無人地帯であったから現住民との問題はなかったが、匪賊（反満抗日愛国隊）の横行するところで油断はできなかった。・・・

昭和十二年と十三年は、主として本部関係建物と各区の共同宿舎の建設がおこなわれた。家族招致が始まった十三年から十四年にかけては、個人家屋建設が必要数の半数に達した。翌十五年は、開拓事業の基礎づくりが終わった年で、個人家屋建設も九分どおり完了した。この年は、各区により多少異なるが、経営は、団の共同から部落の共同に移行した。十六年には個人用の畜舎・倉庫の建設もおこない、翌十七年より個人経営への移行が始まった。

農耕については、満洲拓殖公社がトラクター班を入れて開墾してくれたが、初年度は自家用野菜の作付程度であった。・・・入植三年目からは、土地が肥沃でなんでも作れたし、東安の関東軍第六守備隊がいくつかの大部隊を抱えていて、食糧・飼料、とくに野菜はいくらでも買入れたので生活は豊かであった。（同書、130-131p）

## 行ったときはみんな共同生活

満洲の開拓地はただ広大なだけではなかった。優が生まれ育った長野県の山間地とは比べようもなく豊かな土地であった。しかしそこは偽満洲国の一角につくられた開拓地であったことを、幼い優は知るよしもなかった。

実際に開拓地は確かに豊かだった。優にもその記憶が残っている。実りも豊かで暮らしやすい土地であった。そして兄弘明はもう立派な働き手であった。

行ったときには、畑も、何もないんだね。ただ何軒かの建物があって、みんな共同の生活でねえ。その1軒の家の中に、4家族か、5家族か、けっこう大勢がそんなかに詰まっって、暮らしはじめた。でも家がないもんで、それぞれの家族が別々に暮らすことはできなくて、何家族も一緒に暮らした。覚えとるのは、畑がまだないもんで、お兄さんが、あの頃は20歳ごろになったかなあ。・・あれは何というの、開拓するトラクター、あれで、野良を、うん、馬じゃなくてトラクター、エンジンのついとる。後ろに、いくつかあれがついとって、土を掘る、回るやつじゃなくてねえ。それで掘って（耕して）いくんだ。そのトラクターをお兄さんが運転して、うん、そいで開拓していった。開拓地では、大豆とかね、コーリャンとか、その掘った（耕した）ところに、種子を蒔くだけで育て、たくさん採れた。

## ほんのちょっとだけの米

住宅も耕作地も自力で整えなければならなかったが、ともかく開拓団も整備され、住宅も個人のものとなっていった。またこの長野村開拓団の近くには朝鮮人の集落があった。

家もだんだんに、大工さんが家を造って、だんだん個人の家になって、分けていっていきよくなった。畑には、なんでも作れたんな。コーリャンとか、大豆とか、麦とか。・・お米はねえ、けっこう遠い本部っていうところがあってねえ。その本部の近くに、・・朝鮮人が、そういう部落があってねえ、朝鮮人はみんな田んぼを作るんだねえ。・・私のクラスの中にも、朝鮮人がおって、一緒に勉強しとって。それは開拓団ではなくて、開拓団の外、開拓団の近くにある朝鮮人の部落か、朝鮮から行ったのか、そこまではっきりわからないけどね。だから朝鮮人がけっこう田んぼ作っておった。私たちは、ちょっと、ほんとにちょっとだけだね、田んぼを作るのは。お米を少し作っておって、まず食べるものは、お米が少ないもんで、お米の中に、ほとんどコーリャンとか、麦とか南瓜とか、大豆とかを混ぜて炊いたものだった。それにキビ、トウモロコシも、作っていた。

## 2人の姉は密山市へ、父は冬の炭焼きに

小学校1年の夏までを日本で過ごした優は、長野村開拓団でも小学校に通った。はじめは親許を離れ寄宿舎に入った。しかしまもなく寄宿舎が火災にあい、焼け出され、家から通うことになる。冬の厳しい寒さのなかを苦労して通ったことを覚えている。

子ども心にも厳しい冬であったが、幼子を抱える8人家族が食べていくためには、父鷹雄の働きだけでは十分ではなかった。姉たちは開拓地を離れて働きに出る。それからあとは一家8人がそろって暮らすことはなかったのである。

はじめは上のお姉さんと2番目のお姉さんも、みんな開拓のところに一緒に住んでおったんです。それから少しするとだんだんに家が建ってきて、家と畑を分けてもらって、個人の経営になっていった。それからの向こうでの生活は、まず、お父さんが、冬になると畑の仕事がないもんで、山の奥に行って1人で、そこに住んで、木を切って炭を焼いとったんです。1人っきり、山の奥へ入って。家族から離れたとこで炭を焼いって、出来上がったのを家に持ってきて、自分のうちも使ったり、他の人に譲ってやったり、ということをしておった。

それからまもなくして、上の春子お姉さんと千恵子お姉さんが密山市へ出て行って、お店に勤めた。お店だと思うが、店の従業員か、そういう仕事だったと思うんです。

### **母の死、こんなに大勢残していっちゃうなんて**

一家の苦難がはじまったのは、姉2人が密山市へ働きに出たあとだった。末の妹の満子が生まれる。そして兄弘明が現地召集された。一家の貴重な働き手を失うのである。小学生の三男優を頭に、3歳年下の四男進と、学齢前の四女勝子、生まれたばかりの五女満子を抱えていた。苦労がたたったのだろうか、母まさゑは幼子4人を残して他界する。

終戦の3年前かなあ、お母さんが亡くなって。病気で、きっと肺の病気だと思う。小学校を卒業するころだと思う。それと、お兄さんが、向こうについて1年くらいトラクターの運転して開拓していたけれど、すぐ兵隊さんに行っちゃった。行ったときはどのへんかわからないけれど、本人に聞かないとね、きっと満洲のどっかに行って、終戦の時は朝鮮だった。お母さんが亡くなっちゃったときに、お兄さんのところへ手紙を出して知らせた。でも、本人が言うには、あの頃はとても戦争が厳しくって、帰れなかった。うん、お兄さんは帰ってこなかった。

お母さんが亡くなったときの気持ちは、さみしいような、こんなに大勢残してねえ、いっちゃうなんて、ちょっと困るかなあ、というそんな思いだった。さみしいような思い出があったんだけど。亡くなったあと、近所の人たちが棺桶を板でつくってくれて、近くに埋めて、お墓を作った。そのとき、2人のお姉さんは密山市へ行っとなった。お母さんが亡くなったあと、2番目のお姉さんが密山市で結婚しちゃったんだ。相手は日本の人だった。それでお母さんが亡くなったら、お父さんが上のお姉さんの春子を家に呼び戻して、家の仕事を、誰もやる人がおらんもんで、呼び戻して、それで、一緒に畑の仕事をするようになった。

## 昭和 20 年 8 月 10 日

幼い弟妹 4 人の面倒をみたのは、蜜山市から戻った春子だったのだろう。畑の仕事を手伝いながら幼い弟と妹の面倒をみたであろう春子は、まだ 20 歳前の若さだった。父鷹雄は一家の将来をどのように描いていたのだろうか。一家は苦難の中にあった。しかし本当の苦難が一家を襲うのはこのあとだった。昭和 20 年 8 月 10 日、ソ連軍進入の報が伝えられる。

優と同じ開拓団にいた林<sup>はやし</sup>志<sup>し</sup>ず<sup>え</sup>ゑは、この日の様子を、「満蒙開拓引き揚げの記」(NHK 長野放送局編『満蒙開拓の手記—長野県人の記録—』1979 年)に次のように記している。筆者は長野県下<sup>しもす</sup>諏訪<sup>わまち</sup>町出身、大正 2 年生まれ、当時 32 歳である。

この年の八月一〇日朝八時ごろ、隣の主人が一升瓶と盃を持ってとび込んで来た。「ソ連の飛行機がやって来る。戦争がはじまるんだ。早く身のまわりの仕度をしておけ。昼はソ連兵に見つかるから、夜の八時に出発する」といって、別れの酒をひと口飲む。苦<sup>ク</sup>力<sup>リ</sup>に手伝わせて馬車に、食料品、衣類、布団など最小限の荷物と馬糧を積み、夜になるのを待った。雨が降り出して来た。・・・

集合場所は一〇〇メートルばかり離れた広場で、定刻近くなると暗やみの中を、ガタガタと馬車の音がしはじめた。・・・雨の中を前方の馬車に続いた。石のない満州の道は、雨でぬかるんだ。・・・

草原を続く長い道は、四方から集まった避難民と馬車でいっぱいだった。雨が小止みになったころ、誰かが「伏せろ、飛行機が来るぞ」と叫んだ。皆は馬車からおりて、草叢に伏せた。子どもが泣いてしがみつの中を、飛行機は銃声を残して去って行った。馬車に戻って、また出発した。夜になって、また雨が降り出した。前方の山に匪賊がいるというが、道は一本なのでどうしてもそこを通らないといけない。たいまつのような火が、前方でゆらいで見える。馬車のきしむ音と呻き声と、ときどき闇を貫く銃声が聞こえる。(同書、106-107p)

この時のことは、13 歳の優にも、生々しい記憶として残っている。父と姉と幼い弟妹の一家 6 人による逃避行がはじまる。逃避行の始まった 10 日夜は折りしも土砂降りの雨であった。数日避難していればまた開拓地に戻れると考えていたらしい。身の回りの荷物とわずかな食料をもっただけであった。しかし、この逃避行は終わることがなかった。再び開拓地へ戻ることはなかった。13 歳の優の記憶によって、逃避行を再現してみる。

1 人が馬に乗って来て、急の連絡が来た。「ソ連が入ってきたで、日本と戦争始めて入ってくるで、早く山の中に逃げるように」それで、あわてて馬車に、お米とか、その時は 2、3 日山の中に避難して、また戻って来る、そのような考えだった。そいで馬車に、日常に食べるお米とか、味噌とか、布団とか、そういうものを積んで、避難が始まった。長い列なんだよ。それが勃利のほうへ行くんだって、それが雨が降ったり、ちょうど 8 月だったもんで、大変で。10 日の夜は、土砂降りの雨だと思う。・・・覚えている。大変な、それが何か、いつかわか

らないけど、そういう一番苦しい、一番というか、とても苦しいような、悲しいような、そういう雨だった。その雨を避けるものも、・・・ないね、あっ、何か、百姓が使う、あの一、何というかわからないけど、ああいうものとか、草で作った（蓑）、ああいうものを着る人もあった・・・。

## ソ連機の攻撃に耐えて

土砂降りの雨の中で開始された逃避行は、数日で終わることはなかった。避難先も、めざす方向も定かではなかった。ソ連機による激しい攻撃がはじまる。食料も食べ尽くしていく。混乱の中で自決する団員もでる。しかし、父1人と20歳の姉、そして幼子4人という一家であったが、避難所まで何とかたどり着く。優はこの逃避行の様子をさらに語り続けていく。

だんだんに勃利のほうへ近づいていったけど、行く途中で、勃利はだめだっていうことになって、それで、山があつてねえ、その山をめざして行くことになった。<sup>りんこう</sup>林口っていう県の近くだね、そこに着く前に、日本人の軍隊と一緒にあつてねえ。でもそこはソ連に近いんで、飛行機が2、3分で飛んで来ちゃうんだよ。それで日本人の軍隊、馬に乗っとる人もおるし、鉄砲担ぐ人もおるし、トラック来てね、兵隊を乗せる、それと一緒にあつたら、ソ連の飛行機に見つかつて、爆弾を落としてねえ。機関銃で撃たれる。みんな馬車を持っとったけど、馬が驚いて、みんな逃げて行っちゃつて、・・・大勢、めちゃくちゃになつちゃつて・・・。それで、私もキビ（トウモロコシ）の葉っぱの畑の中に逃げ込んで身を隠した。・・・溝とか、掘つてあるじゃない、畝が。畝があるねえ、そこに隠れておつた。ソ連機が機関銃掃射すると、キビ（トウモロコシ）の葉っぱなんか、パラパラ、パラパラと落ちるんだよ、みんな弾なんだよ、みんな。その時は、これでお終いだと思つたんだけど、一つも当たらなくて、運がいいのか、わからないけど・・・。その時は、お父さんもみんな無事だったんだよ。

## 馬を殺して、煮て食べた

それからソ連機が消えると、また避難が始まる、それから山に登るときに、馬車をもつとる人も、もう登れないじゃない。だからお米とか、食料の米を全部、個人個人に分けて、ポケットに入れてそいで歩きながら、生のお米を食べた。そいで、お米も何もないときには、ただ1頭残つていた馬を、銃で撃つて殺して、大きな鍋をもつとる人がおつたもので、そいで、馬を殺して、煮て食べた。そのときに塩味のない不味さがわかつた。塩がないんだよ。だから、馬を殺して分けて、ちょっとずつ食べて飢えをしのいだ。

この時の逃避行の様子を、やはり同じ開拓団の1人で、優の南隣の長野県上伊那郡<sup>かみかたざりむら</sup>上片桐村（現下伊那郡松川町）出身で、明治35年生まれで当時43歳の米山好雄は、「半生の記」（NHK長野放送局編『満蒙開拓の手記－長野県人の記録－』1979年）

に、次のように記している。

軍隊が長野村軍用道路を勃利へ退却して行ったあと、その筋よりの連絡で、村民全員が十日間の食糧を持って老人や子どもを馬車に乗せ、軍隊の逃げた勃利街道を西へ西へと進むことになりました。日中は草かげやきび畑に身を隠し、夜を待って歩きました。二、三日過ぎたころ、夕食仕度の避難民の上に、突然ソ連機三機が襲撃して来ました。広々とした草原では隠れようがなく、夏草に身を伏せるのみでした。時が去って死者がでたことを知り、遺体に手を合わせながら草を刈ってかけてやりました。

食事はおろか、休む間もなく行軍を強いられます。牡丹江<sup>ぼたんこう</sup>へ向けて、足を引きずりして進むしかありません。誰かが山中で老人と赤児を二人、涙をのんで犠牲にしました。みんな無言で手を合わせる。許せ、連れてやれんことを！ とみんなそう叫びたいのです。歯を食いしばって歩いたが、夕方から一寸先も見えぬほどの雨降りになりました。一晩中降り続いて、シートの中でびしょぬれになってうずくまる子どもらに、どんな言葉もかけてやれませんか。……

毎日、馬の足あとに溜まった雨水を飲み、草をかけ分けて歩きました。家を出るときに一頭ずつ馬を連れて出たのが幸いして、これが唯一の栄養補給になりました。馬肉を湯がいて、各家ごとに人数に応じて分け、味も塩気ありませんがとにかく腹に押し込み、幼な子にはかみくだいてあたえました。(同書、182-183p)。

### 山中に1ヵ月、夜歩いた

優の逃避行の話はさらに続く。この逃避行の中で、2番目の姉千恵子と再会する。また幼子の記憶に残る逃避行の苦難は、大人の目と異なり低い目線から見たものである。余分な修飾語は省かれ、感情表現は抑制されている。そのためであろうか、かえって印象が強い。

その時に、密山市で結婚した2番目のお姉さんたちと会った。……密山市は日本が負けたって早めにわかったので、それで日本に帰るにも、貨物車っていうの？ 箱の中の……、それに女性と子どもしか乗せてくれないんだ。だからお姉さんと子どもは乗っていったけど、お義兄さんは乗れなくて、やっぱりソ連機の攻撃を受けて、さっき言ったところで、林口の山に入った。それで一緒になった。そのことを他の人から聞いてね、私、ちょっとそのへんは詳しく覚えていなかったけど。……女性と子どもは貨物車に乗って避難できたんだけど、お姉さんの子どもが1歳ぐらいかなあ、その貨物車のなかで息が止まっちゃって、死んじゃって……。男の子だった。それでお義兄さんは貨物車では一緒に日本へ帰れないもんで、開拓団の人と歩いてきた、それで私たちと一緒にあったっていうだけだね。

山にはいるときも、ソビエトの飛行機が来て、爆弾を落としたり……。飛行機が来ると、みんな草の中に隠れちゃうんだねえ、あーいっちゃったなあ、って立ち上がると、飛行機の後ろのほうから機関銃で、バタバタって撃ってくる。そのように亡くなった人も大勢おるしね。

それで山の中へ入って、森の中1ヵ月ぐらい山の中において、昼間は木の下で、みんな隠れておるんだよ。食事をすることはできない、煙を出して火を焚いてということができない。だから食べるといっても、生のお米を、みんなポケットの中から出して食べたり。そうして夜、歩くんだね。夜は眠くて、眠くてしょうがなくて、何度も転んだけれども。

## 犠牲となった女と子どもと老人

それで、山を登るのも大変だで、私の2人の妹がまだ小さいもんで、お父さんが何回も捨てたんだよ。小さい子どもと一緒に逃げられないんだよ。1人は勝子、1人は満子、満洲で生まれたんで満子っていう、2人がいてねえ。一緒に逃げていた他の家族ではねえ、歩きながらお母さんが横になったまま、そこで息が止まって死んじゃって。その横で子どもがねえ、そのお母さんのそばで、「お母さん、お母さん」って泣いとるんだ。でも、それを誰もが助けることができない。自分が逃げることで、まだその時は精一杯で。それで、私の家族は、お父さんが、2人の妹が小さいもんで、2回ぐらいかなあ、捨てて、逃げて行っちゃう。でも、やっぱり肉親だもんでねえ、また、戻って拾ってきて、連れてきた。そんなことをしたけれど。

それともう一つはねえ、私、実際に見たのは、桑原の奥の方だけどもねえ、あの人は、もう60何歳かなあ、おじいちゃんがねえ、あの一、「自分を鉄砲で撃ってくれ」と、「もう一緒に逃げられないで」と、木のところに立ってね、そいで、息子が、銃で、ドーン、と撃った。実際に見た。その人は、桑原の奥の四徳しとくというところの人だと思うんだよ。それがね、名前は忘れちゃったけどね。日本に帰ってきたお兄さんたちに話したら、そのことを知るとるっていう話だった。

それで、食べるものがなくて、中国の農村の村に着いたら、ある人が、何か持っとる、時計とかね、布とか、こういう布とか何かで、塩を中国の方々に交換してもらって、そいで畑のあるところは、キビ（トウモロコシ）とか、ジャガイモとか、掘って終わったとこを、また手で掘ってみて、残してある、そういうものを、生で食べたり。食べれる物は、もう何でも食べた。山に山ぶどうがあるじゃい、小さい、山のぶどうとかそういう物を食べた。

## 4. 牡丹江、ハルビンから長春（ちょうしゅん）へ、帰国の汽車を待つ

### 牡丹江で武装解除

優一家は幼子を連れた長い逃避行の末、ようやく牡丹江にたどり着いた。そこで日本が敗戦したことを知る。『長野県満州開拓史 各団編』によれば、9月4日のことである。逃避行開始から1ヵ月近くがたっていた。この牡丹江は空襲で焼け野原となっていた。ここでソ連軍によって武装解除される。「そこで日本人は銃とか、刀っていうの？ 日本刀は何っていうの？ 刀とか、全部武器をおろした」と、優は記憶して

いる。先の記録によれば、牡丹江市の収容所で約1ヵ月を過ごした。しかしとても冬越しはできないとの判断から、優一家の属した開拓団は牡丹江市から今度はハルビンに向かうことになる。この過程でソ連兵の暴行に遭遇する。幼い優の記憶にも鮮明に残っている。

## ハルビンへ

それから、木材を運ぶ、何ていうの、森林鉄道だと思う。その上に乗せられて、ハルビンへ行くんだね。そのときにちょっと気をつけないと（無蓋車だから）、コロって落ちちゃう、落ちちゃうともうお終い。おしっことか、それもその上でしないといけなかった。慣れちゃうと、もう恥ずかしくないけど、みんな、ちょっと気をつけないと、コロと落ちちゃうと、もうみんな終わりなんだよ。

それともう1つは、その汽車に乗る前だったけど、歩いていたときだったけど、途中で、ソビエトの軍隊がやって来て、子どもも大人もみんな手を挙げて、身体の上から下から、みんな全部、検査されて、時計とか、ネックレスとか、いろいろなものを全部盗られちゃって、何にもなくなっちゃた。そんなこともあった。

## 避難民であふれたハルビン駅

それからまた、汽車に乗ってハルビンに着いたんだ。ハルビンに着いて、それでちょうど夜だったんだなあ。みんな駅の中に泊まった。足が入るとこなんかないんだよ、人がいっぱい。そいである日、実際に見たのは、私の同級生のお姉さん、ソ連の兵隊さんが入ってきて、駅の中にね。それでお姉さんは20歳ぐらいか、ちょうど年頃の女性だもんで、でも、みんな隠しとくんだけどね、顔とか見つかって、2人のソ連の兵隊さんが連れて行って、その女性のお父さんが、「連れて行かないで、連れて行かないで」って何度言ったかわからないけど、連れて行かれた。それでお父さんも連れ戻そうとついて行ったんだよ。そしたら、ビューンと銃で撃たれて、そのお父さん亡くなっちゃって、そのお姉さん連れて行かれちゃった。そういうところを見た。

それともう1つは、みんな歩いて行って、どのへんにもソビエトの軍隊がおったもんで、兵隊さんがね、行って、村とかそういうところへ着くと、みんなが女性を、みんなで中に、男性が囲んだ。若い女性は土とか炭で顔を真っ黒に塗ったりして、ソ連兵から隠した。そういうような状態だった。

## 長春、2番目の姉との再会と別れ

それから、ハルビンから長春まで行った。着いた長春でこんなことがあった。長春に着いた次の日に、長春市街の西のほうに学校があったんだよ。航空学校があって、そこへ行ったんだ。そこへ行く途中で、ちょっとこれは細かなことなんだけど、行くときのことだけど。私が道端で、道の端に水の流れる溝があるねえ、そこに三角形の帽子があったんだよ。帽子というかコーリヤンの皮で作った百姓がかぶるような、笠のような帽子。それで私がちょっと拾って、かぶってみたり、それで邪魔になるもんで、また捨てちゃったり、そいでまた拾ってきたり、何かの用に立つかと思って持ち帰った。そいで、学校、航空学校着いてね、日本の兵隊さんの、あれは何というの？ ご飯を炊く、弁当のような。そう、はんごう。飯盒で、コーリヤンのご飯を炊くときに、その帽子を焚き付けにしようって、お姉さんが破ったんだよ。破ったら、その帽子の芯の中、真ん中から、お金が出てきた。隠してあったんだ。それがけっこう大金で、今でいえば3万円くらいかねえ。さっそくそのお金でお米を買って来て、お米の白いご飯を炊いて、食べた。そんなこともあった。

そこで私たちが長春へ着いて次の日に、その航空学校へ行った。私たちが出かけた後で、2番目のお姉さんと旦那さんが、誰かに聞いて、私たちが長春へ着いた、って聞いたもんで、いろいろ食べ物持って来て長春駅まで来てくれたんだよ。ところが、他の人から聞いて、もう行っちゃったあとで、結局会えなかった。それで別の人たちが私たちに、姉さんたちの住所を教えてくれたんな。長春のどこにいるか伝えてくれて、お父さんと探しに行ったんだよ、そうしたらちょうど、旦那さんは仕事に行っとなら、お姉さんが1人だけだった。そこでお姉さんが、ご飯、白いご飯を炊いてくれた。あの頃、御馳走っていっても、ジャガイモとか、南瓜とかそういうものだったね。そこで1度会えたけど、また別れちゃったんね。

これが姉との別れであった。その後、姉夫婦は日本に引き揚げ、山形県に落ち着く。この姉と再会するのは、37年後の一時帰国の時である。このハルビンの収容所の様子を先に引用した、米山好雄の手記は次のように記している。

家を出るときの牡丹江まで出ればという望みのその牡丹江は、すでに焼け野原と化して一人の人も見当たりません。日本人収容所がハルピン寄りの拉古らくこにあると満人に教えられ、歩いていくことにしました。・・・ここは日本軍の兵舎であり、三〇〇〇人くらいの大部隊の兵舎と見られたが、建具は全部持ち去られていました。いや、襲撃の跡が残り、見るも無惨な瓦礫の山といったほうが当たっているでしょう。ここでも連日のように、死者を送る列が絶えませんでした。おそらく六歳以下の子どものほとんどが、死んだといっても過言ではないでしょう。自分の子どももこの朝、布団代わりにカマスの上でその小さな命の灯を消しました。コウリヤン、粟、とうもろこし、黒パンで、どうして子どもが生きられましよう。ここで冬になったら全滅だと皆で話し合い、金のある人が出し合ってソ連軍の隊長に、大連だいれんまで行けるように証明書を作成してもらい、ハルピン回りの鉄道で何日もかかって、奉天まで行

きました。

一〇月中旬に加茂<sup>かも</sup>小学校に収容されましたが、発疹チフスが流行し、ここでも多くの犠牲者が出ました。毎日何人もの人が倒れ、明日はわが身かと迫まる不安と絶望の中で生きました。それまでは食糧の配給があったのに、今後は自力で生きようとの通達が来ました。(米山好雄、前掲書 184-185p)

## 5. 瀋陽（しんよう）、家族との別れ

### 一番の悲しみ、上のお姉さんの死

一家は長春から瀋陽へ向かうことになる。当時の奉天である。優の口から出てくる地名は旧日本の用いた呼称である奉天ではない、新中国の瀋陽である。ここまで行動を共にしてきた長野村開拓団も、本隊を離れて別行動をとる者、混乱のなかで別れ別れになった者、死亡した者などで人数が減っていく。ここで一冬を過ごすことになるのだが、越冬中に優は次々と家族を失って独りぼっちになっていく。それが優の運命を変えていくことになる。優の語りは続く。

それから、長春から瀋陽だ。瀋陽へ行ってみると大変なことになっていた。汽車が、日本へ帰る汽車がもう出ないっていう、困っちゃって、汽車も動かないんだ。だから、そこで、ほとんどの人がみんなバラバラになってね、家族も。

瀋陽に着いた3日目に、上のお姉さんが亡くなった、春子っていうお姉さんがね。あの頃流行しとる病気は何という？ とてもひどい、チフス。あつというまに転んじゃう（亡くなる）んだね。上のお姉さんは下痢をしとったけどね。

そのことが、今まで一番悲しみが残っている。病気になって、瀋陽の2つの学校に分かれた。私の家族は1つの学校にまとまっておったけど、みんな動けずに、ほとんど横になっていた。病気になっていた。それでまだ元気だった私が世話をすることになったんだね。・・誰かが世話をしなきゃあ、ご飯を炊いたりして。ところが薪がないんだよ。燃やす、薪がなくてねえ。学校の近くに半分くらい壊れたような建物がある。学校か、何か知らんけど、その時は国民党<sup>こくみんとう</sup>の兵隊さんが銃を持って壊さないように守っていた。でも薪がないから、何とかそこまで行って、木を拾ってきたり、壊したりして薪にして、それでご飯を炊いて、食べさせてやった。

ある日、お姉さんが、ちょっと「サツマイモを買ってきてくれ、食べたいで」って言ったんだよ。それで私が、お金も少ししかないんで、ちょっと小さい、このぐらいのサツマイモを2つ買ってきて、お姉さんに、「買ってきたで、食べな」っていったら、お姉さんが「優も食べな、大変だで」、そのサツマイモを手渡した。でも、まだ食べないうちに、逝っちゃったんだね。渡して、お姉さんが手を出して持ったところで、もう逝っちゃったんだね。

お姉さんが亡くなったら、あとで満洲の長野村の人たちがね、一緒に、もうほとんど冬だったもんで、穴なんか深く掘れない。だから浅く掘って、ただ遺体が隠れるぐらい掘っただけで、学校の裏の、その穴の中に埋めた。そのようななかでお姉さんが死んでいった。

## 2人の妹を中国人に預ける

その頃は中国人がいっぱいやって来るんだね、小さい子どもももらいに。仕事をさせるために連れていったり、女の子なら嫁さんにするようにもらっていくんだね。それでお父さんが、私を、何？ ストーブとか、煙突とか、いろいろなものブリキで作る個人の工場へ連れて行って、ちょっと仕事をするように言われた、1ヵ月くらいだったかなあ、やったのは。しばらくして、お父さんがまた迎えに来て、だめだ、うちにおらないとだめだ、みんな病気になるので、だめだ、って言われて、それで私もまた戻った。

でも、お父さんが死ぬ前に、2人の妹を、勝子と満子、2人をねえ、いっぱいおる中国人のなかでも、この中国人なら優しそうな、親切そうなような、ああいい人だなあと思える中国人に、2人の妹を預けたんだね。本当は、今思い出すと、本当は、この2人の妹を預けた中国の人はどこに住んどるか、2人の妹を預けるのはどんな場所か、本当はそこまで行ったほうがよかったんだけど、その時はついて行かなかった。2人を預けて、それで、少しのお金をもらった。しょうがないじゃい、食べて、生きていく、そのために何とかしないと・・・。

それで、後になって、また今でも探したけども、どこに居るのかわからない。私たちが中国におるときに、北京市内にはおらなかった。そいで、東北におる人たち、親戚の人にも事情を話して、探したけども、わからなかった。それで今も行方不明、死んでしまったのだから、生きて居るのかわからない。

## お父さんの死と弟の死

それで、家族全員がここで亡くなったことになっていた。私も死亡、中川村の公民館では、一時帰国してきた昭和57年には、もう死亡しているってことになっていた。一時帰国して、やっと私1人が生き残ったことになった。だから、『長野県満州開拓史 名簿編』にも、中川村の資料の中にも、私1人が生き残ったことになった。

2人の妹を中国人に預けた後、お父さんもすぐ亡くなっちゃって、・・・うん、うん。・・・それで私と弟2人きりになった。お父さんの亡くなったちょうど次の日に、瀋陽の鉄西<sup>てつせい</sup>ってところへ引っ越しするっていう予定があって、その夜、まだ引っ越ししないその夜に、私が、弟の進に、「どうしようかなあ、2人きりになっちゃって」と、どうして生きていくのか、ちょうど相談するようなつもりで、相談していたら、弟の進はコロンと転んで、もう息が止まっちゃたんだ。・・・2人で話してた時に・・・。

みんな、あの病気、チフスにかかって、コロナと亡くなっちゃった。それまで私も生きてこられたのに、なんで私が、身体が一番弱い、家族の中で一番弱かったのに。進なんか、弟なんか、満洲で雪が降って零下40度以上になっても、雪の上なんか、裸足で歩くんだに。私は生まれた時から先天性の心臓病なんだよ、穴が空いとるんだ。だから満洲の学校でも運動会の時なんか、走っても一番最後で、クラスの中でもいないようなもんだった。野球もやるけどね、あんまり走れないし、一番弱い。でも今まで生き残ってきて70過ぎたけどね。弟なんか、とってても元気で、何も病気がないけど、コロナと逝っちゃうもんだね。・・・うん、うん。

## 収容所を離れる

それで、次の日に収容所を出て鉄西へ引っ越した。鉄西は、工業のほうかな、今でいうと。そこでもねえ、1つの部屋の中にね、何家族も病気で倒れてみんな横になって寝ておった。元気っていうのが私1人だけなんだよ。それでもうそこを逃げてきた、生きておる人たちのためにも、何とかして、焚く木とか草とか採ってきて、ご飯を食べさせてやっていた。みんな、「優のおかげだ、優のおかげだ」って、言ってたけどもね。でも、その時考えたのは、私も自分でなんとかしないと、もうこの人たちと同じようにチフスになって倒れてしまう、そうしたらもうお終いだ、と思ったんだ、うん。

それで、ある日、私の同級生が、同級生の妹を中国人に預けたんだ。もう食べる物もないし、お金もないで、「明日、あそこの妹を預けてあるところへ行って、中国のお父さんから、お金をもらって来る」っていうことだったので、「私もついて行く」って言った。そしたら、「いいよ」って言うてくれて、私もついて行った。ついて行って、そこに着くと、あの時はちょうど中国のお正月、春節で、その家ではみんな、中国の麻雀とか、あういうものをやっていた。そこで、1晩椅子の上に座って過ごした・・・。

## 毛布1枚持って

でも、私、何とかしなきゃ、って、次の日に、1人で歩いて、私を預けた中国の、小さい煙突とか、ストーブとかを作る工場へ行ったんだよ。けっこう遠いんだけどね。行った、そうしたらちょうど、ご主人がおらないというもので、そいで奥さんは決めれない、っていわれた。そこでご飯食べさせてもらってから、そこを後にして歩いて、歩きながら、どこへ行ったらいいのか、何が何だか頭がわからなくなって、もう頼れる人がどこにもいなくなっちゃって、どうしたらいいのか、わからなくなった。

歩いていくとそのとき、ちょうど前でのほう（前方）から、1人がやってきて、その人は同

級生で、「どこへ行くの」って聞かれたもので、「もう行くところがない」って、いろいろ言ったら、「じゃあ、私の所へ行こう。私の所の中国人はとても親切で何とかしてくれる」って助けてくれた。

そんなわけでその人について行った。ついて行ったら、その同級生も、親もみんな亡くなっちゃって、兄弟4人がみんな、その中国人のところで生活しておって、それで、そこへ連れて行ってもらった、うん。その中国の人はとても優しくって、餃子を作って食べさせてくれて、それから、そこで仕事を、中国の人がね、私に仕事を探してくれたんで、心配しないで安心した。

それで、その翌日、鉄西へ戻って、布団とか、あんまり良い物はなかったけど、ただ1つ毛布っていうか、避難の時に、中国の人が、私のお父さんにくれた1枚の毛布があったんだよ。そいで、次の日に行ったらねえ、鉄西へ行ったら、収容所の中にみんな倒れて横になっておって、「優、行かないように、どこへも行かないように、助けて」と足を引っ張られて、もう出て行かれないような状態になっちゃった。「どうしようかなあ」、私も、私がここに残って、この収容所にいる村の人たちをなんとかして、助けてやるか、ご飯を炊いてやるか、そう考えたりした。でも、そこに居たら、・・・最後、私も同じ結果になると思ったんだ。どうしても収容所を出て行かなきゃ、だめだという、そういう気持ちが強かったんだ。だから、足を引っ張るとるけども、だめだ、私、逃げなきゃ、だめだ、こっから。そう思って、逃げ出して、中国の同級生のところへ行った。・・・毛布を持って、他には何も無いわ。

## 6. 瀋陽・錦州（きんしゅう）、養父との出会い

### 瀋陽、乾電池工場で働く

これがひとりぼっちになった優の決断であった。この決断が優を中国に長く留まらせることになったのである。頼るべき肉親を失い、収容所の床に横たわるおびただしい病人を前にした13歳の少年にできることは他にあったのだろうか。

収容所を出て開拓団を離れた優が行ったのは、瀋陽のしょうせいもん小西門というところにある小さな工場だった。手作業で乾電池を作る工場だった。1号から6号まである電池の小さなケースにまず芯を入れ、小麦の粉に似た白い液体を入れ、大きな鍋のお湯の中で煮沸し、固まらせて電池を作っていた。ここで工場の経営者や周囲の中国人ともしだいに親しくなり、優はかわいがられた。衣服を買ってくれたり、この経営者の奥さんの履いていた靴をもらうこともあった。しかし、かわいがられたのは重要な働き手でもあったからである。与えられる食事は質素だった。ある時食べた豆腐が一番のご馳走だったと優は語る。

食べるものっていっても、毎日毎日コーリャンビーのご飯とかで、白いお米なんか無い。キビ（トウモロコシ）の粉でつくったマントウ、それを蒸かしてあとは漬け物だけ。ある日、

ちょうど1人だった時、豆腐の半分を食べさせてくれたことがあった。それは、もうご馳走なんだよ。

### 映画館で働く、帰国の機会を逃す

しばらく乾電池工場で働く。そこでのちに養父となる男性と出会っている。優の養父となるその男性は、中国語が不自由な優のことを気遣い、中国語を覚えやすいように、人の出入りの多い瀋陽市内にある一番大きな劇場、大世界劇場へ連れて行った。多くの中国人たちと接する環境のなかに優をおいて、自然に中国語を覚えられる条件をつくってくれたのである。こうして優は日本人の社会と少しずつ離れていくことになる。

そこに住み込むことになった優は、劇場の総経理の家を手伝うことも任される。冬は朝5時頃起きて、ストーブを焚いたり、子どもの子守りをしたり、買い物に行ったりと、何でもやった。しかしまもなく養父となる人物の事情から、優は彼とともに瀋陽を離れ、錦州の映画館へ移る。錦州では優は養父と離れて預けられた映画館で映写技師の仕事も手伝うことになる。そこで1人の日本人と出会っている。親しくなったその日本人は30代の男性で、映画の看板を描くことが仕事だったらしい。その日本人を通して帰国のチャンスがやってくる。しかし、優は帰国の機会を逃して行く。

・・・その映画館に、1人の日本人がいて、何をやってたかという、看板を描く、その人がおつてね。その人は、いつも給料もらうと、いつもお店に連れて行ってきて、コーヒーとかミルク飲ませてくれたり気前のいい人だった。ある日、その人から「一緒に日本へ帰ろう」って、言われた。日本へ帰ったら農家でも、会社でも何でもいい、働こう、一緒に帰ろう、っていわれた。私もいいよ、って言ったんだ。帰るなら、その映画館の近くに日本赤十字委員会がある、そこへ行って登録しなきゃだめだ、って言われて、ある日、私がそこへ行って登録して、こういうわけで残された。ずっとみんなと一緒に学校の収容所におればね、いつかの日に日本へ帰れたんだけど、もうひとりぼっちになっちゃったもんで、中国の会社に入った。いつ、みんな帰ったか判らないもんで知らなかった、全然連絡もなかった。

その手続きのことがねえ、赤十字委員会のほうからか、誰かから、総経理の耳に入ったんだね。私も看板を描いている日本人と日本へ帰ろうとしているということが耳に入ったんだね。でも、その総経理は私の養父から優を預かっているもんで、優が逃げていったら、養父が帰ってきた時に困る。それで一緒に帰ろうって誘っていてくれたその日本人をクビにしちゃった。映写技師として、もう別の人が入ってきた。そのときはもう逃げれなくて、日本へ帰れなくなってしまった。

一緒に日本へ帰るつもり日本人がいなくちっちゃって、どうしようもなくなった。もうやっぱり、13、4歳の年だったし、やっぱり日本は自分の祖国だと思えば、日本人だもんで、や

っぱり自分の故郷へ帰らなきゃよくないと思っとたんだよ。でも、それが帰れなくなってしまった。

この当時、錦州も、瀋陽でも、国民党と八路軍はちろぐんとの戦闘が展開されており、瀋陽は八路軍に包囲されていく。ほとんどの会社とか、店も戸を閉めて、避難する住民も少なくなかった。まもなく瀋陽は解放された。

## 7. 北京、養父の故郷へ

### 中国人となる、食べるだけの3年間

優は養父となる人物に連れられ、混乱する錦州を離れる。北京へ行く。養父となる人物が優を手放さなかったのである。寄るすべのない優はこれに従った。北京には養父の兄夫婦がいた。兄夫婦にも優を養うだけの力はなかった。すぐに北京市内の鉄工所に住み込むことになる。こうして日本への帰国はかなわなくなる。

北京での優は、まず養父の息子として登録され、養父の名前から、秦啓福しんけいふくという中国名を命名される。と同時に、生きるために働かなければならなかったのである。北京での新しい生活は、ますます優を日本から遠ざけ、自分が日本人であることを忘れ、秦啓福として生きていくことになる。

瀋陽がすぐに解放のような状態で、錦州へ来て養父が、どうしても私を、養父の故郷北京へ連れて、一緒に行くように、そういうことで映画館を断って、北京へ行くことになった。養父のお兄さんのところに行って世話になった。それは48年かねえ、1948年。

・・・北京に着いた次の日に、派出所に連れて行かれた。戸籍を作らなきゃいけないんだ。養父のお兄さんはその頃、北京の公安関係の機関に勤めておって、主任になっておったんだ。そうすると、そのお兄さんが派出所へ行って、一言でいいもんで、弟の息子だと言って届け出た。それで養父の息子で、日本人ではないということになった。その時、養父も私も出頭しなかったの。・・・養父の名前がねえ、・・・秦玉忠しんぎよくちゆうっていう名前で、私に、秦啓福っていう名前をつけてくれて、それから中国人になった。

・・・お兄さんの家族は夫婦2人で子どもはおらないけど、養父とお兄さんとは兄弟だけど、急に私と養父の2人が入っていくと、食べる物も少ないし、いろいろ困ることもあるもんで、私はすぐ仕事を探した。それで鉄工所に入ったんな。

あの頃は15歳ぐらいかなあ。それがねえ、3年間、見習工をやってもねえ、給料は一切くれないの。ただ食べさせてくれるだけ。食べさせてくれるのも、ただキビ（トウモロコシ）の粉を焼いたもの、こんな穴のあいとる、あれと漬け物、大根の漬け物なんだ。ただ中国のお正月が6日休み。それと8月15日、お盆休み、1日半、1日半の休みだけ。1日半の半がど

のようになっていたのか、わからないけど。それと5月1日。休みはその日しかない。日曜日なんか、お金なんか関係なく、ずーと。それで見習工だった。だから朝、朝3時か、4時頃起きなきゃならない。起きるとすぐ、鉄を溶かす炉に、火を点けて、準備をした。朝4時頃から12時まで、あの頃は、昼休みもないんだよ。ご飯の時に、さっさと食べて、すぐに出て行って、また仕事をやる。

そして夜も、見習工は12時にならないと眠れないの、うん、夜の12時。で、何をやるかっていうと、キビ、トウモロコシを粉にするの。それを食べるもんで自分たちで粉にするの。それは電気を使うんだけどね。スイッチを入れて、スイッチを切るだけでいいんだけど、その機械の上からトウモロコシを入れてやらなきゃいけない。小麦もやった。

それと鉄工所の仕事は鋳物を作る、その時は鍋、いろいろな鍋を作った。その材料を作らなきゃならなかった。・・・古いストーブとか、いろいろな鉄を小さく、叩いて砕いて、それをまた溶かした。そして鋳型があつて、鍋とかを作った。まず先に、そういう鋳型を作った。その鋳型は何回も使えるんだに。

そういうことを、顔も真っ黒で、夜なんか12時までだもんで、それと、朝3時半か、4時頃起きなきゃだもんで。あの頃なんか職場の中にも、お風呂とかそんなものないもんで、みんな1日終わったら、先輩のために、暗くなって外が見えないなか、仕事が終わったら、見習工、私ともう1人おったけど、鉄の洗面器、ああいうものを作るんで、いっぱいあるもんで、炊事場からお湯を運んできて、1つずつ、10人なら10個の洗面器にお湯を用意するのも仕事だった。3年間、給料もくれないで、食べる物っていても、トウモロコシばかりだった。

## 北京解放、夜間学校で中国語を習う

やがて解放軍が、1948年の正月到北京に迫ってきた。国民党との戦闘の末、北京が解放され、翌1949年10月、新中国が成立する。それとともに優の生活も少しずつ変わっていく。それからだんだんに労働条件も、仕事もよくなってきて、世の中が変わっていく。新中国の成立によって、優も学ぶ機会を得る。こうして優は、養父・秦玉忠の息子・秦啓福として、中国人として新しい人生を歩みはじめたのである。

私は、日本で学校に入ったばかりで満洲へ渡って、勉強しなかったねえ。日本語の勉強も4ヵ月だけで終わってしまって、覚えるって言ったら、アイウエオくらいだった。満洲でも開拓団だもんで、学校があつて、そこでも勉強したけれど、その寮が焼けてしまったりで、だからあんまり学校へは行けなかった。満洲では畑仕事、中国になってもいろいろな仕事をやってたから、日本の学校も、中国の学校も、ほとんどいけなかった。

それで、ようやく新中国になって、夜の学校へ行けるようになった。昼間は仕事して、夜は

学校へ行って、中国語を習った。今でも私は、中国語のほうがペラペラなんだよ。日本語はまだまだ、あんまり深く勉強しないし、みんな忘れちゃったし、50年以上、向こうにおったもんで、日本語は上手ではない。

## 中国人として生きる

当時、周囲の人たちは優が日本人だということを知っていたんだろうか。日本人であることを隠して中国人として生きるなかでは苦労があった。その一つは言葉の問題であった。日本語の訛りは誤魔化しようもなかった。

毎日、毎日、おっかないような・・・。日本人であることを隠しとるけど、中国語をよく喋れないじゃい。「お前は中国のどのへの生まれよ」、とか、「故郷はどこか」と、いつも聞かれたんだね。そういう時には、「東も西も、南北、どっちも行ったんで、言葉なんてめちゃくちゃ」って、そのように誤魔化していた。発音がどうもあれなんだ、日本語訛りなんだ。

## 新たな出会い、結婚

鋳物工場で働くうちに、新たな出会いがあった。勤務先の先輩の同僚から結婚相手を紹介される。13歳で1人中国に残り、中国人として生きるうちに適齢期を迎えていたのである。しかし、結婚に至るまでには、日本人であること、満洲移民の末裔であることを意識し、乗り越えなければならない困難があった。紹介された相手の家族に、日本人であることがわかると、母親に強く反対された。相手の家族は、日本軍の激しい侵略をうけた河北省かほくの農村の出身であった。この困難にも、優は誠実に対処していった。

結婚したのは54年、1954年に結婚して、それで、8年目に長女、今、中川村に住んどるけど。それともう1人次女、また4年後に生まれた。2人の娘なんけどね。

私が日本人だということがいつわかったかということ、家内のお兄さんが北京におったんだよ。お姉さん、お母さんが反対して・・・。小さな鋳物工の会社で、家内のお兄さんも働いていたんで、紹介してくれた。その後、少しずつ日本人だとわかってきたんだ。そのお兄さんが、一緒になるように、って言ってたけど、故郷のお母さんとお姉さんが反対して、だめだ、って。そのことも、また言うと長いけど。

日本人がねえ、家内の故郷河北省の、田舎ね、(戦争中に)日本人も入って来たんだよ、あの軍隊がね、・・・ひどいことをした、村に入って来た時に、村の人を殺したりねえ。その理由はねえ、八路軍。このお姉さんの旦那さんは八路軍の偉い人なんだよ。この家内の村へも行って、・・・家の中に、食事を作る竈(かまど)があるねえ、竈の下から、あれは何というの、道を掘って、その野良から出て行って、もし日本兵が入って来たら、その地下道？ それを掘って、村の中に地下道がいくつもあるんだよ。その地下道を通って、解放軍が、どっかに

隠れておって、日本人の兵隊を運ぶトラックとかが来ると、それをやるんだね、機関銃で撃ったり、手榴弾で投げたり。そうするとすぐ連絡が来るんだ、日本の兵隊が、村にやって来たという連絡が。そうすると家内のお姉さん、旦那さん、この地下道からみんな逃げていくんだね。残ったのはお母さんとかお父さんとか、年寄りの人とか、子どもとか、・・・全部やられるんだ。だから、コーリャンとかキビ（トウモロコシ）の畑とか、みんな隠れて、布団持って、食べ物持って逃げた。それで、日本兵は家を燃やしたり、食事を作る鍋のなかにウンコをしたり、こんなひどいことをした。実際、言ってもどうかわからんけど、実際のこと、これ、家内が実際に見たもんで。そいで、この家の物を、メチャクチャにしちゃったり、・・・。人を殺したりね、縛ったり、家を焼いたり、けっこう悪いことしたんだよ、日本の兵隊。

それは、昔の日本帝国っていうの、帝国軍人だ。それはしょうがないね、今の日本人と別に考えないと。・・・でも家内のお母さんが、日本人の子どもと自分の娘が結婚するなんて、そんなことはとんでもなくて、近所の人たちが何を言うと思うか、って言われるんだ。日本人が入って来て、みんな中国の人を殺した、・・・だから結婚に反対してねえ。お母さんとか、だめだ、だめだって。

## 正直に「私は日本人の子ども」

でも、家内がねえ、北京に来て親戚の家に住んでおった。家内のお兄さんが紹介してくれたもんで、ある日、夕方になって、1度2人で歩きながら話をした。私も結婚のことを1つの大事なことだと思っていたので、自分が日本人だということを黙ったままで結婚して、後で話すという、そんなことをすると、あのねえ、何ていうの、罪があるような、正直でないような、嘘ばっかり言うような、そういうことになってしまう。それで、正直に、私は日本人の子どもで、日本のどこから、どのように今まで生きてきたか、そういうことを全部話したんだよ。それでよければ、一緒になるように、だめなら、もう別々に生きる。そう言ったら、「こんなに、かわいそうな子どもだもんで一緒になる」って言ってくれた。そういう気持ちでね、一緒になった。

それで、結婚して・・・、結婚式を挙げた。そういう写真があるんだけど・・・。

優がその写真を出して見せてくれる。隣でずっと話を聞いていた奥さんも笑顔になって顔を見合わせている。「北京でね、写真屋さんへ行って、結婚したその日に、こういう写真を撮って・・・」と、2人は明るい笑い声を立てた。そして、奥さんは「とってもうれしかった。かわいそうよ、小さいの、かわいそう・・・」、日本語でそ



結婚記念写真（1954年、北京にて）

う話した。さらに、優の通訳で、「故郷のお母さん、お姉さん反対しても、・・・北京ではないもんで、河北省のあそこだもんで、いいわ、もう反対しても。自分で勝手に決めるで・・・、そういう気持ちで決めた。」と続けた。傍らの優は、奥さんの中国語を通訳し終わると「立派だね。」と奥さんをほめて笑顔をみせた。

## 8. 長野県中川村、肉親探し、40年ぶりの一時帰国

### 唐山（とうざん）地震の記憶

すべての家族を失って、中国には1人の身寄りのない優にとって、中国人女性と結婚したことは密かな決意を示すものであった。「もう（探さなく）いい、こっちで結婚したし、日本には戻らなくて。こっちで、中国で生活すればけっこうだ」そう奥さんにも話していた。日本へ帰ることを断念していたのである。

しかし、日本の肉親捜しのことを切り出したのは、奥さんのほうだった。1976年7月に起こった唐山地震が優の運命を変える1つのきっかけとなった。北京市東方の唐山を襲った激しい地震は24万人の犠牲者を出したと伝えられている。唐山市に壊滅的な打撃を与えたばかりでなく、北京市にも被害が及んだ。北京市でも高層建築が倒壊したり、余震が続いた。そのためビルに住む住民は、数日のあいだ戸外での避難生活を余儀なくされた。たまたまこの時、優は健康をそこねて入院していた。家に残されたのは年老いた養父と奥さん、そして幼い娘2人であった。避難生活が続くなかで、一家の男手であり主である優の不在は、家族にとっては心細いものであった。頼りにすべき肉親がいない寂しさを改めて味わなくてはならなかった。優によれば、この時奥さんは「これは困った、何とかしなくては」と思うようになり、それで家内が頭の中で、「こんなに兄弟姉妹が何人もおったのに。お兄さんとお姉さんはまだ死んだかどうかだかわからない、だから、肉親捜しをしよう」といいたしたと優は言う。

### 文革、日本語の本を燃やす

だが、実際に夫妻が優の肉親捜しを開始するまでには、まだ時間を要した。文化大革命<sup>ぶんかだい</sup>が終わり、そのほとぼりが冷めるのを待たねばならなかった。養父秦玉忠の息子秦啓福<sup>かきめい</sup>として生きている優ではあったが、文化大革命のなかでは、日本人であることを秘めて生きなければならなかった。文化大革命から肉親捜しをはじめまでの模様を優は語る。

あの、文化大革命もねえ、私が、養父の息子だ、日本人じゃないと、もともと証明があるもんで心配なかった。勤めていた職場は従業員が8千人おったけど、1番の総経理、社長とか、組織部の部長とか、少しの幹部が知ってるだけで、普通の職場の人は、私が日本人の子どもだということを知らなかった。だから、以前から日本語の勉強の本も、日本語忘れないように、けっこう持ったんだけど、でも文化大革命でとても厳しい、ひどいことがあったもんで、みんな燃やしちゃってしまった。日本へ帰ることをもう諦めて、もういい、日本語の勉

強は、とっていた。

でも文化大革命というと、私よりも家内のほうがやられたんだね。日本人の子どもと結婚して、スパイじゃないかと疑われてね、やられた。私の職場と家内の職場は、けっこう遠いもんで、私の職場のほうには、ほとんど知られていなかった。

## 公安局へ、日本人と名乗り出る

・・それからしばらくして、家内が「肉親は、きっとまだ生きている」と。肉親捜しをはじめたのは、あれはいつだったかなあ。1981年ごろかなあ。そんなことができるようになったのも、中国の文化大革命の<sup>よにんぐみ</sup>四人組が終わってからだった。北京の公安局へ行って、「実は、私は日本人孤児で、肉親を捜したい」ということを申し出た。いろいろなことを手紙に書いて、国のほうに、公安局に頼んで、瀋陽で別れたままの2人の妹の行方がまだわからない、それとお兄さん、お姉さんがまだ中国におるのか、日本へ帰ったのか、わからない。そういうことを言ってお願ひしたら、北京市を探してくれたんだな。北京の、夕刊っていうの？ 晩報にね、記事にしてくれて、探したけど、北京市内にはおらないことがわかった。

## 日本から、手紙と1枚の写真

奥さんに強く勧められて肉親捜しをはじめた優であったが、中国での肉親に関する手がかりをつかむことはできなかった。13歳で敗戦を迎えた優は、日本人残留孤児として認定されるなかでは一番年上であった。だから、日本名も、出身地が南向村であることも、鷹雄という父の名前も、母のさかゑという名前も、兄や、姉、妹たちの名前も全て正確に記憶していた。日本の故郷のことも記憶のなかに残っていた。渡満前に故郷の神社で、全家族で撮った写真のことも記憶していたのである。その優の記憶をたよりに、肉親捜しの範囲を日本へと広げていった。

家内が「どっかで親戚が生きているで、手紙を出すように。」って言ってくれた。それで、中国大使館、東京にあるねえ。日本大使館、北京だもんで、両方に手紙を出したね、政府に頼んで、肉親を捜して、と。

手紙を出してしばらくしたら、北京の公安局の外事課に行ったんだ、呼ばれてね。行ったら、驚いた。何を言われるのかと思ったら、「お前はどこに手紙を出したか」って言われて、肉親捜しをお願いする手紙を出したと答えた。その時に面会してくれた人も、とてもやさしく、よかった。「心配はない、もう四人組は終わりで、もうこれからは海外にも、外交がある国は、どんどん手紙を出してもいい、自分で出してもいい」と言われた。ちょうどその頃は運がよかったか、日本の国のほうから、外務省のほうからも、中国の外務省にお願ひがあったんだよ。中国に残された日本人孤児の、捜すのを。ちょうどその時期が当たったもんで。

そうしたら、中国大使館から、長野県の社会部を通じて中川村まで調査に行ったんだね。そうしたら、みんなびっくりしてね。もう公民館では、死亡になっとな。それからお兄さんから、山形のお姉さんに連絡して、そして、満洲に渡る前の家族のあれを、あの写真を、国のほうから書類といっしょに中国大使館へ、また北京へ、私のところまで送ってくれた。

### **手続きに1年間、日本語を独習**

いつものように自転車に乗って、北京市の郊外にある職場に向かった直後のことだった。日本からの1通の手紙が届いた。奥さんは優の帰りを待ちきれずに封を切った。封筒のなかから出てきたのは1枚の写真であった。優一家が渡満前に故郷の神社で撮ったあの写真であった。あの写真が海を越えて、40年以上の時間を超えて、北京市に暮らす中国名秦啓福、日本名小沢優の家に届いたのである。優の帰りを待ちきれなかった奥さんは急いで優の職場に電話した。職場の電話が鳴った時、優はちょうど職場に着いたところだった。

家内から、ちょうど会社に着いたときに、電話がきて、「日本から写真がきたで、きっと見つかったんだ。早く帰ってくるように」って言うもんで、「だめだ、そういうわけには(いけない)、こんなに汗びしょりで、今着いたばかりで、また帰っていくなんて(できない)、明日の朝にしろ」って言った、ちょうど夜勤の時でその日のうちに帰ることはできなかった。・・・びっくりしたり、うれしいような、びっくりするようなそんな気持ちだった。

夜勤があけた次の日、それで勤めから戻ってきて、さっそく公安局の外事課へ行って、「日本から手紙が来た」って、それを見せてやって、「では、さっそく手続きをしましょう」ってしてくれた。しかし、手続きには1年間かかった。その頃は四人組が終わったばかりの頃だったんで、まだ厳しいんだよ。私は日本で生まれて、中国まで来た。私は日本のこと少し知っておるけども、手紙を出したり、そんなこと全くできないもんで。日本語の本を読むことも、それも見つかる、スパイとか何かだと言われちゃうもんでできなかった。

それからは忘れかけていた日本語を1人で勉強しはじめた。それから12時前には寝たことないんですよ。中国の本屋さん、専門の外文の本屋さんへ行って、日本語の独習書を買ってきて、アイウエオから、ゼロから始めたんだ。そのことは肉親が見つかって、日本へ一時帰国の手続きをして、娘を連れて、家内を連れて、1人も日本語がしゃべれないと、何もならないと思って。通じないとね、言葉が。それで一生懸命、1年間、夜12時前に寝たことない。職場で夜の当番するときも、アイウエオはじめてね、ひとりでね、うん。

### **子どもたちは知らなかった**

奥さんに背中を押されるようにして、はじめた肉親捜しが実を結んだのである。帰国に備えて、日本語を独習しはじめた優であったが、この時初めて、奥さんが家に

戻った娘たちに父親が日本人であることを打ち明けた。肉親捜しをはじめた時には、まだ2人の娘に自分が日本人だということを話してはなかったのである。

急にね、家内が・・・、家内が言ったんだ。写真が届いてから話をしたんだ。・・・養父が80歳。うれしいような、悲しいような、・・・泣いちゃったって、うれしくって。

奥さんの中国語を通訳してくれた。日本の肉親を捜し当てた時に最も喜んでくれたのは奥さんだった。写真が届いたときのことを思い出すと20年以上たった今でも感激がよみがえってくるのだろう。

「家内は私と一緒にするときにも、結婚するときにも、とても、ひとりぼっちで、1人の親戚もおらないで、かわいそうで、そういう思いで結婚してくれて、それで日本の、手紙と写真が届いたら、肉親が見つかったら、うれしくって泣いちゃった。」「子ども、みんな泣いちゃって。とてもひとりぼっち、中国に親戚もおらんし、孤児だもんで、とてもかわいそうで、そういう気持ちで結婚した。結婚するときにも家族のお姉さんとか、お母さんとか、ねえ、反対したけど、優のほうを思い出すと、かわいそうで。かわいそうで一緒になった。・・・日本から送ってきた手紙と写真を見ると、泣き出して、ちょうど子どもも学校から帰ってきて、3人で、みんなで泣いとったんだ。」

優が奥さんと二女を伴って帰国したのは1982年10月30日のことであった。中川村では村を挙げて44年ぶりの帰国を祝い、歓迎した。中川村の広報誌『広報なかかわ』(第55号、昭和57年11月15日)は表紙を、役場庁舎前の歓迎式で花束を受け取る優一家の写真で飾り一時帰国を伝える次のような記事を掲載している。

中国から当村高嶺(桑原)出身の小沢優さん(四八)が、妻尹瑞秀(いづいしゅう)さん(四八)と二女の秦玲玲(しんれいれい)さん(一七)を連れて、十月三十日、四十四年ぶりに故郷の当村へ里帰りしました。

小沢さんは、昭和十三年の夏、父母、兄弟姉妹八人で旧満州東安省の開拓村に入植しましたが、十九年に母親が死亡、また、終戦で引き上げる途中、父、姉、弟が病死、中国で生まれた子を含む妹二人は行方不明になってしまいました。小沢さんは北京出身の養父に救われ、養父の故郷で重機器関係の工場に勤め、その後、中国人女性と結婚、現在二人の子どもがあります。

小沢さん一家は六ヶ月間当村に滞在する予定ですが、当分の間は実兄の高嶺の小沢弘明さん宅に滞在します。

この時の一時帰国には、中国籍で20歳を過ぎていた長女の秦美娟<sup>びけん</sup>さん(21)は渡航手続きが難航しビザ発行が遅れて同行できなかつた。翌年3月に長女美娟さんが来

日できたのは、5ヵ月後のことであった。当初一時帰国の期間は6ヵ月の予定であったが、ビザの延長が認められ、一家の滞在は1年間となった。これは、帰国に備えて日本語を独習し、日本の故郷での生活になじもうと努力を続けた優の努力によるところが大きかった。「他の家族はね、そういう気持ち少なく、ただ肉親との再会がうれしくておったばかりで」いたので、日本社会になじめなくて、一時帰国の6ヵ月の予定を繰り上げて中国へ戻った例も少なくなかった。

一時帰国した優一家を迎えて催された中川村の歓迎会の席で、次のようにあいさつし、自らの決意と感謝の言葉を述べている。

私は、日本を離れてから四十四年後の今日、機会に恵まれて家族を連れて故郷の中川村に帰り、親類の方々と会うことができ、また故郷を見ることができ、私たちの心は比べようのない感激を覚え、千言万句をもってしても言い尽くすことはできません。

私の少年時代は動揺の時代であり、何年間も就学できることはなかったのも、文化の程度は非常に低く、内心の感情を表現することは極めて困難です。このため、雑ばくなくつかのことは記して、中川村へ来てからの体験と感想とします。

#### 一、親切な歓迎とお心づくし

私たちが日本に到着した当日、厚生省をはじめ各行政の方々、親類や故郷の方々の心のもった歓迎と接待を受け、また、その後も続々と真情溢れる日中友好の御厚意の手を伸べてくださり、この一人の平凡な日本孤児に対し、精神面、生活面で至れり尽くせりのお心づかいをいただき、私たちはたいへん感動し、感謝しています。

#### 二、物質生活が豊富

この度は機会に恵まれて、日本の田舎で日本に働く人々といっしょに暮らし、私たちは日本の働く人々の勤勉、善良、人づきあいのよさなど、みやびやかで礼儀正しいことを体験によって理解しました。日本の皆さんの生活方式に私たちはすぐに慣れました。各種の食物—例えば主食、副食、菓子、果物など品数が多く、栄養は何れも豊富で、私たちは毎日たくさんいただいています。

また、日本のへんぴな山間の家々も、みな自動車、バイク、電話、電化製品がありますが、このような高い生活水準は中国が学ばなくてはならないところです。

#### 三、文化と礼儀を重んずる高尚な気風

昭和十三年、わたしが高嶺にいて小学校一年に通ったとき、毎日かばんを背に曲がりくねった山間の小道を二・五キロメートルほど雨の日も風の日も通いましたが、今は昔の小道はなくなってしまい、新校舎が建設され、新しい車道が改修されています。そして、村のバスが毎日学童を送り迎えし、暖かい教室の中で学習していますが、なんと幸福なことでしょう。

高嶺あるいは大草では、農家あるいは役場内で、学生、農民、労働者、先生など人々の間で、知己であれ、知らない人であれ、みな頭を下げてあいさつをし、みな文化と礼儀を重んずる高尚な気風をもっています。

私たちは日本にいる間、必ず日本政府の法令を守り、兄の家の農事と家事を手伝い、近所の皆さんとの関係をよく保つようにします。私たちはできる限り早く自分の及ぶことのでき

る仕事に勤め、いくらかでも収入を増やして政府の負担を軽減することを望んでいます。

私たちは日本語の学習に努力して、将来日中両国民の友好的な交流のために努めたいと思います。(『広報なががわ』第58号、昭和58年2月15日)

## 9. 長野県駒ヶ根市、中国と日本のはざままで

### 中国は、第2の故郷

その後、優一家は一時帰国から6年後の1989年2月、優の生まれ故郷である中川村に永住帰国を果たした。6歳の時、家族8人で村を離れた優は、この時57歳になっていた。一時帰国したおりに、中川村が主催した歓迎の席で行った優のあのあいさつは、優の正直な気持ちであった。「できる限り早く自分の及ぶことのできる仕事に勤め、いくらかでも収入を増やして政府の負担を軽減することを望んでいます。」優の気持ちは揺らぐことなくまっすぐであった。仕事を得て、兄夫婦のもとを離れ、さらに日本語を学び、60歳を過ぎてから運転免許も取得し、隣の駒ヶ根市にある県営住宅に落ち着いた。

優にとって、現在の日本はどのように映っているのだろうか。また長く暮らした中国をどのように考えているのだろうか。

中国、ああ、やっぱり第2の故郷だね。私は、中国が、第2の故郷だもんで、中国人の養父が育ててくれて、今まで生きてきたけども、とても中国を尊敬というか、何というの、中国に対して感謝している。日本よりも、中国に戻って、向こうの生活をしたい。そのような気持ちもあるんだよ。でも、家内がいくつかの、病気で帰れないんだ。今の中国のほうは、退職した後、多くの人たちは退職したあと病気にかかっても、治療を受けることは簡単ではない。日本のような健康保険の制度も整っていないし……。だから、家内を中国に連れて行って、病気を治すっていつでも大変なことで……。今の中国は、一生懸命勉強して、日本と同じよ、お金持ちはすごくお金持ちで、貧乏な人は、収入が少ない。中国も同じな、お金持ちはどんどんビルを建てるとか、飯店とか、商売して儲けて、貧乏な人は生きていくのもギリギリで。

でも、私も50年以上中国におったもんで、やっぱり中国の食べ物がいい。それに、北京の郊外に住んでおったもんで、ビルの9階にエレベーターもあって、そのビルを下りると、地下鉄の入口で、朝は、朝の市場、道路の両側で何でもあるんだ、食べたい物が。また夜の市場があつてね、12時頃まで、とつてもにぎやか。ここ(長野県駒ヶ根市の県営住宅)に住んどると、何も無い。冬は暗くなると、もうみんな家に入って何も無い。テレビ観るだけ……。本当は、日本へ57歳に永住に来たもんで、60歳で定年で、3年間働けるもんで、3年間働いて子どもたちをこっちへ呼んで、子どもたちは日本で生活するように、私たち2人はまた北京へ戻って、向こうで生活するような予定だったけれど、こっちへ来て、もう10何年間、ね

え、このまんまんで・・・今まで生きてきたんだけどねえ。・・・だから、・・・まあまあだね、今の生活ね。

### 向こうで生まれた孫、日中友好のために

優の語りはつねに冷静で、感情をあらわにすることはない。

現在の日本での生活に満足も感じている。その一方でそうではない気持ちもあるのだろうか。長野県の山間の農家に生まれ国策の一翼を担って満洲に渡ることになった一家の三男である小沢優として生きた少年時代。一労働者として夫婦ともに新中国で誠実に働き、秦啓福として生きた青年期から壮年期。中国人の妻とともに永住帰国を果たし、小沢優に戻って日本で暮らす老後の現在。

自分の意思を越えて時代のなかで3つに分かたれてきた自分の人生、歴史と国境を超えて形づくられてきた家族。だが、自分の人生と自分の家族の境遇を嘆くことは決してない。その時その時を決断し、後戻りすることなくつねに前向きに、誠実に生きてきた。自分の人生に誇りを持ち、家族に深い愛情を抱き続けている。しかし、と言おうか、だから、と言うべきか、優は自身の生涯全体を見渡す地点に立った現在、「今まで生きてきたんだけどねえ。・・・だから、・・・まあまあだね、今の生活ね。」と言うほかはないのだ。

木造棟割りの県営住宅の一角に病院通いを続ける妻と2人で静かにつましく暮らす優は、今も中国語の新聞を熱心に読み続け、テレビのニュースを見ることを欠かしたことがない。とりわけ中国残留孤児に関係するニュースを注視し続けている。その集団訴訟の記事の切り抜きを丁寧に保管している。そんな優には何にも代え難い大きな希望がある。お孫さんの存在である。娘夫婦の子どもとして中国から帰国し、地元の小学校に編入し高校を卒業した孫の1人は、今、北京の語学学院に留学している。孫娘の洋香である。孫娘について語るとき、優の表情は明るい。そして、第2の故郷である中国について思いを寄せる。

洋香、ああ、やっぱりね、洋香がこっちで高校卒業して、中国へ行って、中国語の勉強して、・・・洋香も向こうで生まれたもんで、すぐではないけど、中国語を覚えやすいと思うんだよ。それで向こうで中国語とか、日本語はもう勉強して基礎があつてしゃべれるもんで、また中国語とか、英語とか、よく頑張つて勉強して、やっぱり、日中友好のためにも、日中文化交流のためにもね、よく頑張つて努力してもらいたいと、そう思っている。

私も、小さい頃から中国に残されて、学校には入ってなかったけれども、一生懸命、夜間の学校で勉強して、今でも中国語のほうが、日本語よりもペラペラなんだけど・・・。

日本に帰ってきて、こっちの会社に勤めていたときに、中国語の通訳の仕事は何年間か、やったなあ。それで、向こうのホテルの従業員も、「あれ、小沢さんの中国語は北京の標準語で、とてもすばらしい」って言って、「日本人には見えない」って（笑い）、誉められた。だから

私もこういう通訳の仕事がとても好きで、自然に、日中友好とか、文化交流だとか、いろいろな交流になると思う。

私はもう歳になったもんでしょうがない。孫の洋香ももしできれば、勉強も続けて、どんな職業でもいいけど、日中友好の仕事を、私に続いてやって欲しい、と思っとる。

## 中国を一回りしたい、中国の友だちに会いたい

やっぱりねえ、日本には、ほんとうは3年間、日本に来て、子どもたちを呼んで、安定したら中国の北京へ帰りたい。その気持ちだったけど、来てね、もう孫がね、4人の孫を育てて大きくなってきたんだよ。そう、あつという間にか、10年がたってしまった、向こうへ帰れなくて、それに家内はいろいろな病気だし、歳になっていくし、それであとはもう仕事はできないし、子どもたちもみんな大きくなったし、日本のほうの介護保険、それに世話になるしかないかなあ、って言っとるんだけど。

でもいつかは家内を連れて、中国を一回りしてっていうか、南のほう、<sup>けいりん</sup>桂林とか、そういう歴史のあるところとか、実際に行ってみたいなあ、と思っとるんだけど、なかなかねえ。

隣で聞いていた奥さんが中国語で何か話した。優が通訳した。最後の一言は日本語だった。

「北京の会社で、20年間勤めて、友だちがいっぱいいるんだよ。」

「……会いたい。」



## 聞き書きを終えて

私の勤務する高校に、1人の中国帰国生徒がいた。彼女は小学校4年の時に、残留孤児2世の母と一緒に祖父の故郷である長野県中川村に帰国、日本での生活は5年目を迎えていた。日本語に少し訛りがあることに気づかなければ、中国残留孤児の3世と知ることはなかった。いまふうの丸文字に似た几帳面な文字のきれいな答案、文化祭のパンフレットを飾った巻頭詩、太陽と向日葵を描いた文化祭のポスターなどなど、彼女は多才な生徒だ。物静かだが屈託がなく、笑みを絶やすことがなかった。「あなたのおじいさんからね、話を聞かせて欲しいのだけれど」と頼むと、返事はすぐに届いた。

小沢優さんを最初に訪ねたのは、冬の初めだった。棟割りの県営住宅の一角に、奥さんと静かに暮らしておられた。通された部屋はきれいに整頓されていた。こたつで向かい合って話を聞かせていただいた。語りは、小学校にあがったばかりの夏に渡満したときの記憶からはじまり、40年余りの時間を追って整然と進んでいった。聞き手の私はうなずき、時には声を抑えて嘆息し、

聞き入った。時々、小沢さんは「あのう、なんていうの？」と尋ねられ、私は日本語の単語と日本語らしい言い回しに言い換えることがあった。70年の自身の人生を語るには、小沢さんの日本語は十分ではなかったのかもしれない。時折、ことばを探すもどかしさを覚えながら語っているようであった。しかし、それがかえって過剰な飾りや感情の高まりを、抑制していたように感じられ、聞き手の私にそのまま強く響いてきた。語られたものがそのまま物語りになっていた。『長野県満州開拓史』、公刊された手記、『中川村史』を参考に準備していったメモをひろげる必要はなかった。

いつも小沢さんは、自分を取り巻く状況に流されることも、そして逆らうこともなく、ありのままの自分で生きてこられた。長いものに巻かれてきたわけではない、不条理ともいえるおのれの人生を嘆いたり、世の中や他人を批判することもない。自身の生き方を見失うことなく、いつも人生をおのれのものとして、小沢さんは生きてこられた。

病院通いの続く中国人の奥さんをいたわり、生まれ故郷を少し離れた小さな県営住宅に暮らす小沢さん。60を過ぎて運転免許を取得し、今も中国語の新聞を熱心に読み続ける。中国残留孤児の集団訴訟を注視し、日本と中国との友好に役立ちたいと願い、北京に留学している孫娘の話題に目を細める。そのときの笑顔の目元がやさしい。聞き手の私はどうにもならないことを考えてしまう。運命が少しでも変わっていたとしたら、1つの社会の中で生き続けることが可能だったら、小沢さんの人生はどうだったろうかと。

どうやら私は思い違いをしていたようだ。地元上伊那の満洲体験者、中国帰国者の語りを聞くのだ、と一般化して考えていたらしい。満洲を体験し残留孤児となり、新中国と現在の日本という2つの国を生きてきた小沢優さんという1人の人間の語りを虚心に聞くこと、その小沢さんに連なる人々の生き方に想像をひろげていくこと、それが語りを聞くことの意味ではないだろうか。そこから中国残留孤児、中国帰国者の姿の1つが見えてくる。(もとじま かずと)